

助動詞「す・さす・しむ」確認テスト（使役・尊敬） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

問1 使役。理由：「させ」のすぐ下に尊敬語がなく、「上げさせて」と直後に接続助詞「て」が続くだけだから。御格子を「(人に命じて) 上げさせて」の意。下に尊敬語を伴わない「す・さす」は使役と判断する。

問2 尊敬。・下に尊敬の補助動詞「給ふ」がある。・「せ給ふ」をひとまとめにして二重敬語（最高敬語）と呼ぶ。天皇・皇族・大臣など最高位の人物への敬意をあらわす。

問3 「大臣が、笛をたいそう見事にお吹きになる。」（「吹かせ給ふ」は二重敬語で、大臣への高い敬意をあらわす。）

問4 尊敬。理由：「させ」の下に尊敬の補助動詞「給ひ」があるから。「流させ給ひて」で「(帝が) 御涙をお流しになって」の意（二重敬語）。

問5 使役。「知らせけり」の「せ」の下には尊敬語がなく、過去の助動詞「けり」が続くだけである。「この子のことを言ひ知らせ（て聞かせ）た」の意で、使役と判断する。

問6 尊敬。下に尊敬の補助動詞「たまふ」があるため。「(おそばの人を介して) お伝えになる」の意で、二重敬語。

問7 「君（=主君）がいらっしゃる所に、人を遣わして手紙（の言葉）をお伝えになる。」（「伝へさせたまふ」は二重敬語。）

問8 使役。「詠ませ」の「せ」のすぐ下には尊敬語がなく、「(親王に) 歌を詠ませ（て）」と他者に詠ませる意だから。「親王に歌をお詠ませになり」ではなく「親王に歌を詠ませ」と訳す使役の用法である。

問9 使役。「せ」のすぐ下にあるのは謙譲の補助動詞「参らせ（参らす）」であって、尊敬語ではないから。「す・さす」を尊敬と判断できるのは尊敬語がすぐ下に続く場合であり、間に謙譲語がはさまるときの「せ」は使役と解するのが一般的である。「(女御が、人に) 御琴をお弾かせ申し上げなさる」の意（「参らせ」が謙譲、「給ふ」が尊敬）。

問10 尊敬。呼称は二重敬語（=最高敬語）。「舞はせ給ひける」で「(入道殿が) 舞をお舞いになった」の意。

問11 使役。「しむ」の下に尊敬語がなく、「読ましむ（読ませる）」と生徒に読ませる意だから。

問12 「しむ」は主に漢文訓読体（および一部の和歌・改まった文章）で用いられる助動詞である。⑨は漢文訓読調の文であるため、「す」ではなく「しむ」が用いられている。

問13 「先生が、生徒に古文を読ませる。」（「読ましむ」は使役。）

問14 使役。理由：「従はしむ」の下に尊敬語がなく、「民を従はせる」の意だから。「天子が徳によって民を従わせる」と訳す。

問15 終止形は「しむ」。⑩「馬を走らしめて」は漢文訓読調の文であり、この文体では使役の助動詞として「す・さす」ではなく「しむ」が選ばれる。「(人が) 馬を走らせて」の意。

問16 「聖人が、人に道を行わせる。」(「人をして～しむ」は「人に～させる」の意の漢文訓読特有の言い方。)

問17 「月(の出)をお待ちになるうちに、夜がしだいに更けてしまった。」(「待たせ給ふ」は二重敬語。「ぬ」は完了。)

問18 尊敬。下に尊敬の補助動詞「おはします」があるため。この敬語表現は二重敬語(最高敬語)と呼ぶ。「(帝が)御琴をたいそうみごとにお弾きになる」の意。

問19 活用形(すべて下二段型)。・①「させ」=連用形(下に接続助詞「て」が続く)。・⑬「せ」=連用形(下に補助動詞「給ふ」が続く)。・⑮「させ」=命令形(「届けさせよ」の「させよ」。命令形は「せよ/させよ/しめよ」)。

問20 ①の「上ぐ」は下二段活用、その未然形は「あ段」以外(上げ=げ)であり、四段・ナ変・ラ変以外の活用なので「さす」が付き「上げさせ」となる。④の「知る」は四段活用で、未然形は「知ら(あ段)」、四段の未然形には「す」が付くので「知らせ」となる。すなわち接続する動詞の活用の種類によって「す」か「さす」かが決まる。

問21 助動詞「す」であるものは(ア)と(ウ)。・(ア)「待たせ給ふ」の「せ」=尊敬の助動詞「す」。・(ウ)「言はせけり」の「せ」=使役の助動詞「す」。・(イ)「申す」の「す」はサ変動詞「申す」の語尾であって助動詞ではない(識別注意)。

問22 ⑭「言はせ」の「せ」は使役(下に尊敬語がなく「言わせた」の意)。③「流させ」の「させ」は尊敬(下に尊敬語「給ひ」があり「お流しになる」の意)。同じ「す・さす」の系列でも、下に尊敬語があるか否かで意味が分かれる点が違いである。

問23 下二段型(せ/せ/す/する/すれ/せよ)。型の名称は漢字で下二段。

問24 「す・さす」のすぐ下に尊敬語(給ふ・おはします等)があれば尊敬、なければ使役と判断する。(これが最も基本的な見分けの手がかりである。)